

おいんなして縄文村へ！

- AM 8:00 縄文土器野焼き開始
 9:20 更級小学校鼓笛隊パレード
 9:30 開村式
 9:40 聖火着火式
 9:50 豊穰儀礼
 10:20 聖火分配
 10:30 古代食ほか体験開始
 10:40 ジャンベ演奏（更級小学校6年生）
 11:30 五加子供太鼓演奏
 PM 12:20 ジャンベ演奏（教室受講生）
 1:00 縄文芸能村
 2:10 縄文太鼓・縄文の歌演奏
 2:30 閉村

制作：さらしなの里縄文まつり実行委員会事務局
 （さらしなの里歴史資料館内）

編集：大谷善邦 翠川泰弘 荒井君江

〒389-0812 長野県千曲市羽尾 247-1

Tel:026-276-7511 Fax 026-261-4161

e-mail:rekisi@city.chikuma.nagano.jp

来年もおいんなして！



わが心
 慰めかねつ
 更級や
 姨捨山に
 照る月を見て

（現在の長野県域）について古来詠まれてきた地名の歌の中で最も多い地名は「さらしな」です。一見残酷さを思わせるこの地名が、このように多くの人の口の端に上って来たのは、逆説的ですが、当地の名前を唱えれば心が癒される空間として大事にされていた証拠です。

明治の市町村合併ではこうした歴史を踏まえ、当地は古代以来の人々があこがれた姨捨山のもとにあることから更級村と名乗ることになりました。

更級村という村名は昭和の合併で戸倉町となつてなくなりました。さらに平成の合併で千曲市となり、更級郡も大岡村が長野市と合併したことで郡名としては消滅しました。しかし、当地は今でも更級地区と呼ばれています。更級小学校、千曲農協更級支所、更級保育園などの施設の名前は、先人が残した貴重な文化遺産です。

当地にはそうした歴史に誇りを抱く人たちが集うボランティア集団「さらしなの里友の会」や、文化芸術を楽しむ「更級人『風月の会』」などがあります。そしてその人たちの多くが縄文まつりを支えるスタッフとなっています。

さらしなの里歴史資料館のご案内



いろんな縄文体験できて楽しいよ！石器作りや音体験もあるよ

展示室ではぼくたちと一緒に発掘された縄文土器や石器たちと出会えるよ！縄文人は物作りの天才だったんだ

縄文時代のアニメや姨捨伝説の切絵の映像がいつでも見れるんだ！



〈海の祈り〉 〈山の祈り〉

ペンダント 1000円
 ストラップ 500円
 所要時間 20～40分



〈イノシシのかべ掛け〉

大 500円
 小 300円
 所要時間 30～60分



〈縄文編物〉

500円～1000円
 所要時間 30～60分

- 開館時間…午前9時～午後5時
 入館は午後4時30分まで
- 休館日…毎週月曜日
 （祝日、振替休日にあたる時は火曜日）
 祝日の翌日
 （日曜にあたる時は開館）
 年末年始
- 入館料…大人（高校生以上）200円
 団体（20名様以上）160円
 中学生以下 無料
- 身体障害者手帳などの所持者
 および付添いの介護者は無料

祈り・・・（縄文のムラに）

星の光に 今日の無事を告げ
夕焼けに子供らの幸せを祈る

里のふもとには 大河の流れ
神の山に抱かれた 私たちのムラ

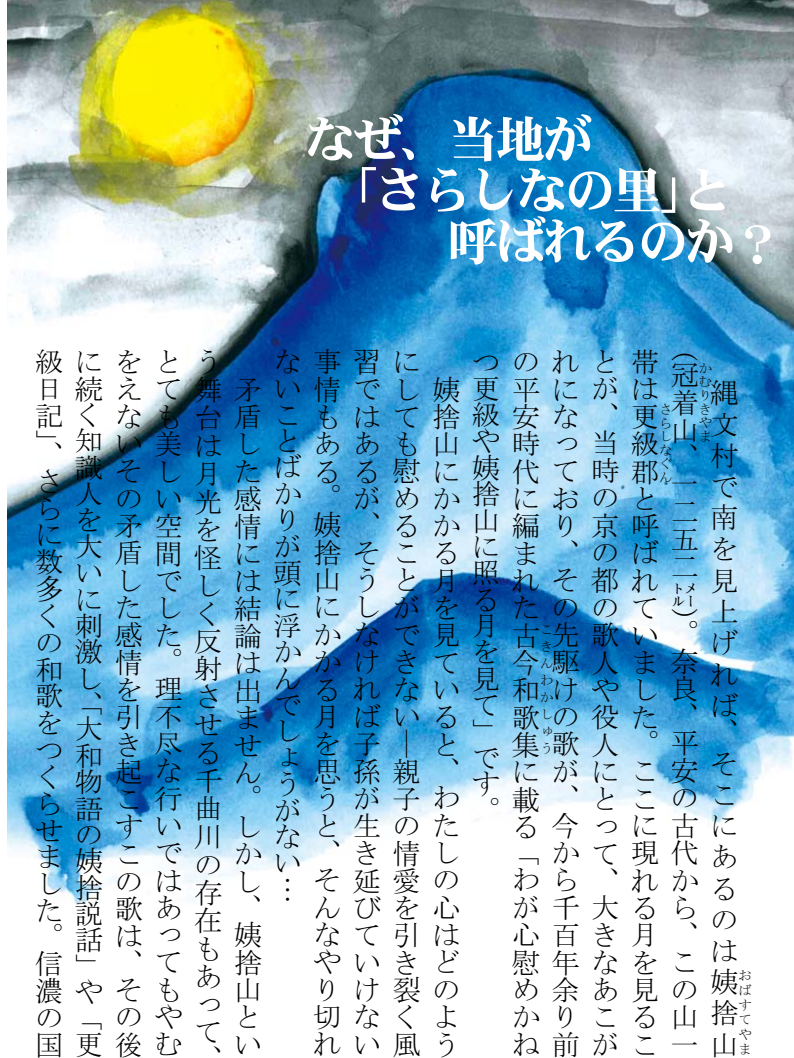
豊かな日々の糧を 今年も下さった
神様のお恵みに 感謝を捧げます

カヤ葺のムラにも もうすぐ冬がくる
深い深い雪の中 楽しみに春を待つ

暖かい炉を囲み 耳をかたむける
昔々のおじいさんの話

里のふもとには 千曲の流れ
冠着に抱かれた さらしなの里

詞：福島修（さらしなの里歴史資料館館長）



縄文村で南を見上げれば、そこにあるのは姨捨山（冠着山、「一二五」ト）。奈良、平安の古代から、この山一帯は更級郡と呼ばれていました。ここに現れる月を見ることとが、当時の京の都の歌人や役人にとって、大きなあこがれになっており、その先駆けの歌が、今から千百年余り前の平安時代に編まれた古今和歌集に載る「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」です。

姨捨山にかかる月を見てみると、わたしの心はどのようなにしても慰めることができない――親子の情愛を引き裂く風習ではあるが、そうしなければ子孫が生き延びていけない事情もある。姨捨山にかかる月を思うと、そんなやり切れないことばかりが頭に浮かんでしょうがない……

矛盾した感情には結論は出ません。しかし、姨捨山という舞台は月光を怪しく反射させる千曲川が存在もあって、とても美しい空間でした。理不尽な行いではあってもやむをえないその矛盾した感情を引き起こすこの歌は、その後続く知識人を大いに刺激し、「大和物語の姨捨説話」や「更級日記」、さらに数多くの和歌をつくらせました。信濃の国

さらしなの里の縄文まつりとは？



現在、全国の各地に縄文にちなんだまつりがありますが、当

さらしなの里に縄文まつりが生まれたのは十六年前。縄文村の舞台であるさらしな里古代体験パークと歴史資料館がオープンしたときに、一緒に結成された「さらしなの里友の会」のメンバーの発案でした。

自治体の公園では火を使うことはなかなかできないのですが、縄文まつりの精神にひたるには、古代人にとっての神聖な火を使うことがなによりも必要だということになりました。

当時のメンバーはみなさん、熟年、壮年、老年層で農業に熟練した人ばかり。火を使うことに慣れていました。公園での火の使用に許可がおりると、体験のアイデアがいくつも出てきました。そうした経緯で現在の体験メニューの多くが生まれました。

その中で、まつりが特に力を入れているのが豊穡儀礼です。その年の山や川の恵みを、神に感謝するために祭壇にささげ、子どもたちが起こした火を土器に着火し、厳かにまつりをスタートさせます。その火は肉を焼く炉に分配されます。つまり、火をきっかけにして命が繋がっていくことを表現しているのです。

より楽しくおいしくするために使っています。

スタッフの中には「教育の場に嘘があってはならない」とおっしゃる方もいます。嘘である場合は、はっきり嘘であると分かるように知ってもらうことが必要だという声もあります。縄文芸能村は嘘を楽しむ場の一つです。

「出店コーナーは止めた方がいい」「もっと縄文時代の暮らしに忠実なまつりにした方がいい」……さまざまな意見はありますが、この里に生まれた子どもたちが立派な大人になること、さらに里の住人だけでなく里のファンになってくれた人たちが、より幸せになることを願うの思いである点では一致していると思います。

共生を一番の原理にした縄文人の精神と、さらしなの里の歴史の厚みを踏まえ、「本物の里」「本物のまつり」とみなさんから評価されるようなものを目指したいと考えています。

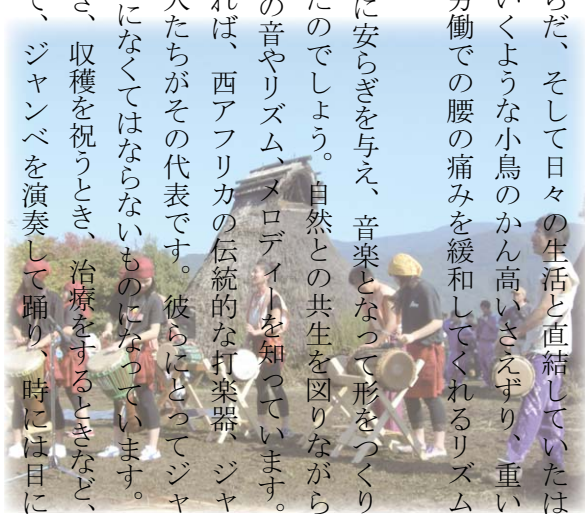
【注】この冊子のもとになっている本が、開催十五回を記念して制作した本「里と人にいやされる『さらしな』——縄文からのメッセージ」です。さらしなの里歴史資料館などで販売しています。価格は千円です。

蘇る縄文の音

なぜ、縄文まつりで縄文太鼓とジャンベを叩くのか？

音楽やリズムの始まりは自然とからだ、そして日々の生活と直結していたはず。頭の中を透けて通り抜けていくような小鳥のかん高いさえずり、重い荷物をみんなで運ぶ時の掛け声、重労働での腰の痛みを緩和してくれるリズムや声…。

これらの音が絡み合い、身体や精神に安らぎを与え、音楽となって形をつくり場をつくり、伝統的に継承されてきたのでしょうか。自然との共生を図りながら伝統文化を保持してきた人々は、自然の音やリズム、メロディを知っています。現代にそうした人たちを探すとすれば、西アフリカの伝統的な打楽器、ジャンベを普段の暮らしで演奏している人たちがその代表です。彼らにとってジャンベは「聖なる太鼓」と呼ばれ、生活になくてはならないものになっています。子どもの誕生や結婚、協同で働くとき、収穫を祝うとき、治療をするときなどに人生の節目や生活のさまざまな場面で、ジャンベを演奏して踊り、時には目に



縄文中期の初めごろには、冠着山の中腹に貯蔵用と思われる穴と土器が見つかっています。ゆずり葉と呼ばれる地籍から見つかったため、ゆずり葉遺跡と呼ばれていますが、住居を営んだ形跡はなく、小さなキャンプ地だったと考えられています。



縄文中期の後半になると、再び円光房地籍に集落を構えます。手鏡のような形をし床に石が敷かれた柄鏡形敷石住居えかがみがたしきいじゆうきょと呼ばれる住居をつくりました。この時期の集落を復元したのが、縄文村―古代体験パークです。その後円光房には晩期まで集落が営まれ、多数の土器や住居、お墓が発見されています。寒冷化を迎えた縄文晩期には、全国的に遺跡数が激減します。長野県内でも遺跡は非常に少なく、住居跡や祭祀跡が発見された円光房遺跡は学術的にも貴重な遺跡です。東北地方の影響を受けた土器（右の写真の右側）がたくさん出土しており、盛んな交流があったことがうかがえます。

なぜ、この冊子を作ったのか？

さらしなの里縄文まつりに関する情報をこのようにコンパクトな形でまとめたのは今回が初めてです。

東北信地域では有数の規模で当地に出土した縄文遺跡をきっかけに十六年前、地元の人たちが自分たちで楽しもうという素朴な気持ちから、このまつりをつくりました。しかし、年々訪れる人が多くなり、体験メニューやイベントプログラムも拡大し、スタッフの歯車感が強くなってきました。そこに三年前から、地元の更級小学校が運動会並みに休日を登校日にして全校参加。「教育の場」としての性格も強まったことから、まつりについての最低限の、しかし、そのエッセンスを文章などできちんと伝えることが必要だと考えました。

食体験コーナーの中には、サツマイモやネギなど、縄文時代にはなかったとされている食材も含まれています。しかし、このまつりは教育の場であると同時に、お付き合いのあまりなかった里の住人同士や里の外からおいでになる人との交流を目的とした「楽しい場」でもあるという考えから、

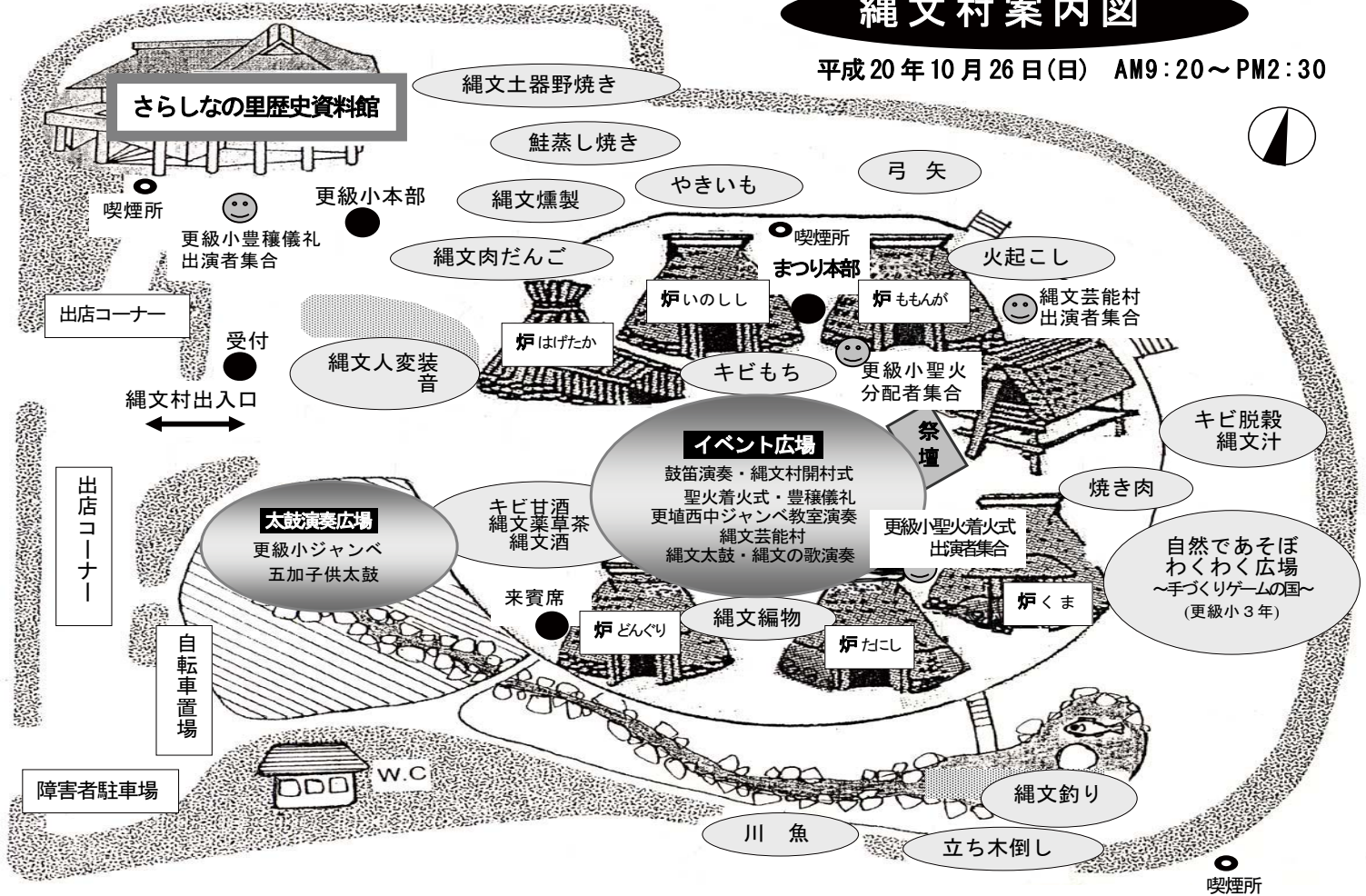


地のまつりの体験メニューはそうした中でも先駆けで、千曲市でもすっかり定着し、評価が高まりました。その背景には当初の縄文まつりを支えたスタッフの多くが、共に暮らした縄文人のライフスタイルを受け継いできた農家の老年、壮年層で、そうした人々を尊敬する若手の人たちがいたためです。

当地に広まっている姨捨話には、一度は山に捨てた老人を子が連れ帰り、その老人の知恵で国の救難を救ったという後日談があります。「姨捨山」の里であるからこそ、縄文まつりが根付いたとも言えるのです。

縄文村案内図

平成20年10月26日(日) AM9:20~PM2:30



さらしなの里の縄文遺跡とは？

さらしなの里に最初に、縄文人が営みをはじめたのは、今からおよそ八千年前。縄文早期と呼ばれる時期で、縄文村北西の方向、小高い尾根の上の芝平地籍です。湿地がありそのほとりに住んでいました。底がとがり、編カゴに似た文様の付いた土器が出土しています。その後も縄文人は何回かこの地を訪れていますが、大きな集落は営まれませんでした。

縄文前期になると、現在は幅田と呼ばれる地籍に進出します。縄文村から更級小学校寄りに広がる台地です。このころ地球は、最も温暖な気候となり、縄文人の生活も活発になりました。

幅田地籍の中、特に円光房と呼ばれる冠着山近くの場所(円光房遺跡)からは、住居の跡や約一辺の楕円形の穴から、十四頭以上の焼けたイノシシの骨と特別な土器が出土し、儀式を執り行った様子がうかがえます。左の写真は、イノシシなどの狩猟に使ったと思われる石鏃です。

見えない祖先の霊や自然の精霊とも交信を図り一体になるといわれています。

縄文時代、樽形をした有孔罌付土器(左の写真)と呼ばれる謎の土器が出土しています。音楽家の土取利行氏は世界各地の民族文化研究からこれを直感的に土器太鼓と判断し、縄文の音に迫る人類にとっての音の世界に挑んでいます。

自然との共生を図り生活を維持してきたという意味で、縄文人と現代の西アフリカの人々には共通するところが多くあります。



縄文太鼓を叩いたら縄文の音になるのかといえば、必ずしもそうではありません。自然に溶け込み、自らを生かす音を見つけたとき、命を生かし生きる音となります。西アフリカの人々のようにわれわれが縄文太鼓やジャンベを叩くことができたとき、はじめて縄文の音が蘇ったと言えるのです。

